

“但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園 「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

第14回「肉用牛になった但馬牛 ～神戸ビーフへの途～」

肉用牛とか乳用牛というように、牛には飼育目的による呼び方があります。

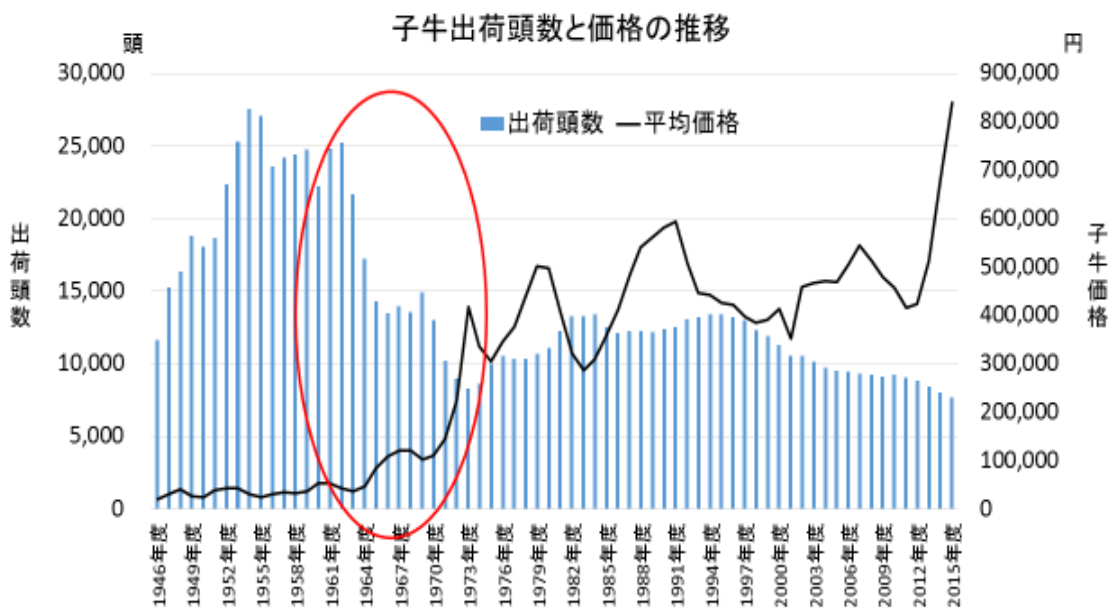
そんな呼び方をすると、但馬牛をはじめとする和牛は、耕耘や運搬といった使役に使う役用牛、使役と肉利用の両方に用いる役肉用牛の時代を経て、現在の和牛になりました。

江戸時代、彦根藩は牛肉を特産とし、幕末に横浜に来た外国人の食用として神戸から牛を輸送した話もありますが、肉利用は極めて限定的でした。明治になって肉食の習慣が始まりましたが、売った牛が肉にされることを知らない農家も多かったといえます。そんなことからすると、明治初頭までの和牛は役用牛であったといえそうです。

明治の中頃になると、都市部を中心に肉食が一般にも広がり、政府が食肉生産を振興したこともあって、肉牛の販売に関心を持ち、肥育に取り組む農家が生まれました。明治末期に農商務省が行った肉牛調査報告に三田牛、江州牛、但馬牛、伊予牛、長州牛、出雲牛、作州牛、神戸牛が有名な肉牛として紹介されていると『兵庫の畜産』に書かれています。1880年代の終わり頃になると、肥育の盛んな地域ができ、ブランドとして認められる所も育っていたと思われます。

そして1960年代、耕運機の普及に伴って牛を使役に使うことはなくなりました。

図は兵庫県の子牛出荷頭数と平均価格の推移です。



1963年度から1973年度にかけて、出荷頭数が激減し、価格が急上昇しています。インフレの影響があるとはいえ、この時期を挟んで子牛価格水準が大きく変わり、経済的性格が変わったと見られます。

こういったことから、1880年代の終わりから1970年頃までが役肉用牛で、それ以降肉用牛に変貌したようです。

県内でも古い肥育の歴史を持ち、記録も比較的残っている三田牛で、役牛から役肉用牛に変わる歴史を辿ってみます。

江戸時代、三田辺りでは、牛が肥えているか、痩せているかというのは農民の勤惰の指標でした。痩せ牛で年貢米を運ばせるのは一村一郷の恥とされ、最も太った牛の畜主に賞米1斗が下される藩もあったといえます。そんなことから牛に麦を食わせて太らせる「飼い肥やし」という習慣が生まれ、明治以降も続きました。

1868年に神戸が開港し、外国人の往来が盛んになって牛肉需要が増えてくると、神戸の肉商は三田から荷物を運んでくる肥牛に着目しました。若牛と肥牛を交換して肉利用するようになり、中には肥牛買い取り出張所を設けるものも現れ、三田の肥牛は名声を博したと言います。

こうなると、肥牛が肉用として利益を生むことがわかり、若牛と交換するだけで得と思っていた農家も肥牛と若牛の体重差を基に追加金を取るようになりました。そして1880年代末には、周辺の郡にも肥育が波及していきました。

また、三田周辺は、池田や伊丹などの近隣に酒蔵が多く、冬季には高野豆腐造りも盛んで、糠や豆腐粕といった肥育用飼料の確保が容易だったことや、この地域は養父から大阪、和歌山に至る但馬牛の流通ルートにあり、体型や資質が良く、太りやすい牛を選ぶことが出来たことも肥育地として発展した要因に挙げられています。

三田以外の地域では、多紀郡では山林の木材運搬や深田^{ふけだ}と呼ばれる湿田を耕耘するのに、力の強い「たまもち」と称する雄牛が使われ、加古川を中心とする播磨地域では牛が不足した大正期から昭和初期にかけて朝鮮牛を、第2次世界大戦中から戦後数年は大型で使役に適した高知の褐毛和種が使われ、後の去勢肥育地としての発展につながったと言います。

大正中期の羽部義孝氏の調査によると、肥育牛は概ね7～8歳のものが多く、『但馬牛物語』にも、昭和初期、肥育に供するのは5～8歳の牛が多かったとあります。

また、肥牛を耕耘に使うと肉量が減るので、耕耘に使うシーズン前に若牛と交換し、交換の時期は4～5月と9～10月の2期に分かれていたと言います。

こういったことからすると、戦前はまさに「役肉用牛」で、使役に使った後、その牛を肉用に肥育したようでした。しかし戦後去勢牛が登場すると、少し様相が変わってきます。（つづく）